

瀕死の日記

二〇一二年六月

春卷

六月一日（金）

灰色の雲が圧しかかってくる。

いつもの猫がいない。

私はコンビニでオレんジーナを買って飲んだ。

六月二日（土）

沢蟹の蟹味噌ほどにも気にしていない。

何を？

何も。

六月三日（日）

晴れ。鎌倉へ。

干物を買う。

内臓を抜かれ、切り開かれた魚たち。

大仏のキーホルダーは誰が買うのだろうか。

六月四日（月）

午前三時に目が覚める。

きつと昼は眠くなるだろう。

「そして、誰からも愛されないお前は、安らかに死にたくなる」。

六月五日（火）

薬が増えたせいで、胃がもたれる。  
生唾が止まらない。

海の中を思い出した。

一面のヒトデ。

六月六日（水）

生きる、ということ。

路傍にムラサキツユクサの花が咲いていた。

六月七日（木）

美しい見知らぬ人に睨まれた。

私はたまらず目を逸らした。

空を見上げるフリをした。

雨が降りそうな気配だった。



六月八日（金）

目を閉じ、息を止める。

これが死ぬということか？

生きているということか？

六月九日（土）

スーパーマリオ、世界で一番死んだ男。  
お前はいつも躍動している。  
怖くないのか？

六月十日（日）

私が嘘をついても、誰も傷つかない。  
傷つけられない。

公園の芝生で小さな子供たちが遊んでいるのが見える。

六月十一日（月）

会社には色々な人がいる。  
みんな同じような気もする。

六月十二日（火）

私の日記の日付には、何の意味もない。  
毎日同じ薬を飲むだけなんだ。

六月十三日（水）

実名。

人間、歳をとれば汚れてくるものだ。

老人は口が硬い。

六月十四日（木）

ツツジの花の咲きつぷりには節操がない。  
これみよがしに。  
もう、うんざりだ。

六月十五日（金）

どこからか、スピッツの「チェリー」が流れている。

「君を忘れない」

私は君を忘れない。



六月十六日（土）

今日、誰かが死ぬ。

明日も。

明後日も。

私には悼むこともできない。

六月十七日（日）

若い頃に一度だけ、オーバードーズしたことがある。  
こんな、晴れわたった幸せそうな日曜日のことだった。

六月十八日（月）

もさもさになっていたイチョウの葉が刈られていた。  
どうして刈る？

私は毎年、憤りを覚える。

六月十九日（火）

いとしいと思えるいのちは、いつも自分以外のいのちだ。  
がんばれ、いのち。

六月二十日（水）

バスに乗ったら、もし小沢一郎にパーマをあてたらかくあろう、というおばさんが座っていた。

私はなぜか得した気分になった。

六月二十一日（木）

ちかごろ就寝時になると、なぜか生唾が止まらなくなる。

私は毎晩コップを布団の脇に置き、せつせと生唾を吐き出す。

誤って飲み込むと胃がむかむかする。

今日もそんな憂鬱な夜が来る。

六月二十二日（金）

「花金」という言葉が、かつてあった。

今でもあるのかもしれない。

しかし、私はビアガーデンに行つたことがない。

六月二十三日（土）

道に十円玉が落ちていた。

私は素知らぬふりをして、それとなく辺りを見まわし、さつと拾い上げた。しばらくして、私はひどく落ち込んだ。



六月二十四日（日）

六月二十四日は特別な日だ。

なぜなら、一年で六月二十四日はこの日しかないからだ。

昔を思い出し、悲しくなる。

六月二十五日（月）

給料日。

だからなんだというのだ。

野良猫はそう言っている。

六月二十六日（火）

斬首された罪人が自分の首を持って歩き出す、という伝説は世界各地にある。座敷からくりをテレビで見て、私はそのことを思い出した。

恐怖と滑稽は相性がいい。

六月二十七日（水）

物凄く太った人を見かけた。

力士なんて目じゃない。

で、棺桶はどうするのだろうか？

六月二十八日（木）

香典返しにお茶と羊羹をもらった。

私は改めて思った。

どうして親族が亡くなるという不幸に遭った人にお金をあげるのだろうか？  
さっぱり分からない。

六月二十九日（金）

帰宅後、ネットで株の予約注文を出した。  
五分後に、やっぱりと注文を取り消した。  
すつきりした。

六月三十日（土）

さようなら、何もなかった、私の六月！